
幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

げんそうげんえいたん
幻想幻影譚

【Nコード】

N4023Y

【作者名】

みなかみれい
水上 鈴

【あらすじ】

作者が張り切りすぎて、荒ぶった小説。一年がかりで己のすべてをかけて書き上げた妄想と願望の産物。以前某誌で連載していたものを加筆修正して投稿しております。ご了承ください。血が、首が、腕が、足が、陰謀が、魔法が飛び交うカオスダークファンタジー。

第零夜 これがすべての始まり（前書き）

この小説は前置きも容赦もなく、血やら陰謀やらが飛び交います。
ご了承くださいまし。

第零夜 これがすべてのはじまり

それは、どこかの世界、いつかの時代。

科学の光が迷信、人ならざるものを駆逐する前の物語。

未だに人ならざるものが、人々が恐れおびえる闇に闊歩する時代の物語。

灰色の石畳が敷き詰められた広場のすみに

うら若い幼さのこる少女と呼ばれてもおかしくはない盲目の詩人が、
豎琴を片手に黒銀の毛並みの犬を傍らに物語を紡ぐ。

はしゃぐ子供の声を聞くと、詩人は近寄ってきた子供たちに微笑んだ。

いつのまにか集まったあどけない顔を期待に輝かせた子供たちに詩人は問うた。

「どんな物語がいいかしら？お姫様を助けた王子様のお話や、
小さな国を救った英雄のお話もあるよ」

「あのね、私はお姉ちゃんの小さい頃のお話がいいな」

「私の？それじゃあ、くわしくは秘密だけど、
それに近い物語を聴かせてあげましょうか」

詩人はひざに置いていた豎琴を持つ。

「ねーねーはやくう」

「せかしちゃだめだよ」

「楽しみだね」

子供らが口々に騒ぐが年長者と思しき女の子がおとなしくさせる。

「今はただ、目を閉じて聞いておくれ」

これは、淡く儚い小さな幻想^{ゆめ}。

これはとある一人の詩人が紡ぐ、真紅と漆黒に彩られた

どこかおぞましくも古めかしい、そして美しい物語。

さあさ、よってらっしゃい見てらっしゃい。

数多の歴史に埋もれて消えた、
とある男と執事の一代記の一部始終のはじまりはじまり。

もしもし、そのアナタ。

どうか、この物語を聞いてくださいますか？

第零夜 これがすべてのはじまり（後書き）

自分の好きなものを詰め込んだらこうなった。

第一夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

好きなものと好きなものを混ぜるともつといいものができると思い込んでいた自分がだめだった。どうしてこうなったんだ。

第一夜 詩人が紡ぐ物語の世界

夜明けとともにその人は動き出す。

すべては親愛なる主一人のために。

漆黒の清潔なスーツに袖を通し、

絹を思わせる艶やかな腰まで届く藍色の髪をうなじで一つにまとめ、
ふちのないメガネをかけてほかの使用人を起こしにかかる。

「サーシャ、アリサ、マルコシアス、

セエレ起きてよ。もう時間だよ」

透き通る男か女かもわからない中性的な声で相部屋の住人を起こす。
「もう起きています桜花師匠」

すでに起床し、

身支度をすませた十代半ばの毛先をまつすぐにきりそろえた黒髪の
少女は

無表情かつ抑揚のない声で挨拶する。

瞳は濃い色のサングラスで隠され、表情を読み取りにくくしていた。

「おはようございます。どうも朝は弱くて……じゃないでしょう！
う！」

わたくしたち意外いないからといってもこの名前で呼ぶなと口をす
っぱく……」

カラスの濡れ羽色の毛先を切りそろえた

十代はじめの鮮やかな董色の瞳の少女が朝早くから説教する。

「あー、はいはい。それは聞き飽きたから」

耳をふさぎ、

藍色の髪をした桜花と呼ばれたスーツの彼女はふらりと出て行って
しまった。

「あのきまぐれっぷりにはおどろきます。

つきあわされるこちらのきもちにもなつてほしいです」

窓際には十代後半から二十代前半のこがらな紺色のショートヘアの

青年が

やれやれとばかりにてぶりを交えたため息をつく。

「その話はなしにしましょうセエレ。」

あの自由が服を着ているにいてる桜花の誘いにのった自分たちがバカみたいですが、

これも一興かもしれません。それより、今は一介の使用人なのでそれから」

こうして一日が始まる。

こうなってしまった理由は、

人ならざる者たちである者らが退屈しのぎにと人のふりをして

一介の使用人としてどこか剣と魔法の世界で働いてみようと考えにのってしまったからであつた。

働き始めて早くも数年。

今使えている主がとても気に入ったのでこのまま原炊き続けることにしたのであつた。

第二夜 詩人が紡ぐ物語の世界

さきほど、桜花と呼ばれた彼女は子供っぽいしぐさや表情から一変し大人っぽく恭しく丁寧にドアをノックし反応がないことを確認し、音を立てずに開ける。

「坊ちゃん、朝です。朝食をお持ちいたしました」

この館の主であり、所有者アルフォード家当主ジャン・マリス・アルフォードを起こすことから執事の一日は始まる。

「ん？・・・ああ桔梗か。昨日は遅くまで読書していたから。もうこんな時間なのか」

「そうです。本日の予定は午前はダンスレッスン、午後からは孤児院の寄付と訪問です」

無言で寝ぼけたまま黙々と食べ進める。

食べ終われば地味なベージュのスーツに着替えて楽器が置かれたダンスレッスンの部屋に行く。数メートル歩いたところで当主の証の指輪とアクセサリを身につけに戻った。

戻り、たどり着くまでに桔梗はぼんやりと己らの主について考え事をしていた。

淡いプラチナブロンドをのばさず右側の一房のみのぼし、

青いビーズのようなアクセサリをつけている。

背丈は小柄なほうでもう18なのに16やそれ以下に見える童顔。

かわいらしく純粋な普段の表の顔と仕事時の慇懃だが

冷徹な笑顔とそうでない笑顔を使い分ける大人な裏の顔を持つ。

やり手で切れ者と評されるが、アイカシア王国を守る12地方の諸侯の末席であるが故に蔑ろにされることが多い。

そんなことにもめげずにやっていく主の背中が桔梗には眩しかった。

「さあ、本日はこのアルフォード家主催のパーティですから、張り切ってくださいませう。」

アリシア、パトリシア、ガイア、アーク」

「張り切っていますね桔梗」

早朝にはサーシャと呼ばれていたメイドは、
のんきに笑ってみせるが本来の仕事以上の仕事量に疲弊しきっていた。

桔梗こと、桜花以外の使用人たちは

この屋敷で働くことになってから決めた偽名で呼び合うもいまだになれず、

苦労と心労と胃痛の連続の繰り返し。

とくに仲間内で

「自由奔放と悪意ない害意と無邪気な残酷さと知識と戦略に長けた
軍師を混ぜたものが服を着ている」と評される桜花は頭痛の種でも
あった。

それでも持ち前の頭のよさで幾度となく窮地を救ってくれたことは
感謝していた。

が、それもケースバイケース。

いまは皆苦労の原因をつくるなと祈るばかりだった。

第三夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

ささやかな疑問は何事にもつきものです。タブンネ

第三夜 詩人が紡ぐ物語の世界

「なぜ私がパトリシアなのでしょう？」

アリサと呼ばれたメイドは一見涼やかな声で問う。

予定が山積みため、いつもの数倍の仕事量をなんなくこなしているようだ、

疲れがでたのかやや顔が青ざめている。

「アーク（箱舟）なんてネーミングセンスのカケラもない名前ですよ。そっちのほうがマシです」

早朝にはセイレと呼ばれたコックがぼやくが、それを黙殺する。

やがて本来の持ち場の仕事に取り掛かるうとして、

井戸端会議に花を咲かせていたが別々の方向へスタスタと行ってしまう。

「どうしてガイアなのかよくわかりませんよ。まったく、あの人の思考はわかりませんねえ」

早朝ではマルコシアスとよばれた庭師が痛んだ花を摘み取り、刈り取った植物を焼却処分した。

一通り仕事を終わらせて、自らの両耳横の胸の上まで伸びたふた房の髪の毛を撫で付ける。

目の高さの部分には瑪瑙製の九つの目が描かれた円筒形のビーズが二つ。

いつものところに作られたのか、なんのためのものなのかわからないが唯一己が命を欠けてでも守り通すと決めた者からのささやかな贈り物。

後に腐れ縁の知人から聞いた話によればそのビーズは『ジービーズ』とよばれるものだと判明した。が、深くは詮索しないことにした。贈り物は贈り物。それで十分だと結論付けた。

「煙が目にしみます」

煙が立ち上る蒼穹を見上げた。

澄み渡る空が高く、気持ちのいい風が吹いていた。

こんな風が吹く日はいい日になると語る友人を思い出して笑みがこぼれた。

この良き日をさらによくするために自分たちはいるのかもしれない
と思いながら、

頼まれていた仕事に取り掛かるべく小走りで屋敷の中に入った。

第四夜 重なる物語と詩人が生きる世界

一方、屋敷の大きさの割りに少ない使用人のために執事の桔梗は招待客のリストの照合から、

食材の吟味、会場のホールのセッティングすべてをひとりでこなした。

すべてが終わる頃には夕日が翳り、二頭だての馬車で主が帰ってきた。

「おかえりなさいませ」

「子供たちが意外と元気だね」

頬が紅潮し、楽しそうに語る主を見て目を^{すが}眇め微笑む。

こうして、夜もふけて夜会が開かれた。

この日のためにと呼び寄せた最高の楽団、

仕事の話やゴマすりが見え隠れする紳士の悲喜こもこも、

流行のドレスを身にまとう令嬢や貴婦人、

色鮮やかで食指が動くような食事、気配りの行き届いた使用人、

華やかで心を奪う歌姫の歌声。

すべてが完璧にそろった夜会だった。

一度、詩人は豎琴を置いた。

「今日はもうお帰り。お母さんやお父さんが迎えに来たよ」
ちらほらと子供らの親が迎えにきた。

「もう、暗いもんね。じゃあねお姉ちゃん」

「じゃあね」

にぎやかな集団が去り、夜の帳が下ろされる直前。

「さあ、行きましょうかマルコシアス」

傍らの黒い犬が立ち上がり、先導する。

赤い夕日の照らす道の向こうから小さな子供の足音がした。

「お姉ちゃん、うちに泊まっていつてよ。何も無いけど」

小さな子供をおとなしくさせた年長の子供が戻り、詩人に声をかけた。

「いいの？」

「うん」

「それでは泊まらせてもらいましょう」

こうして詩人は相棒の犬とともに子供の家に言った。

その子供の家は一般的な中産階級に属する家で裕福ともいえないが、貧しいとも言いがたい家だった。

詩人は一宿一飯の恩にと歌を歌った。

櫛の木のいすに深く腰掛け、

身の回りの一切を詰め込んだかばんを足元において豎琴を手取る。

そして、深く息を吸い込むと歌を紡ぎだした。

夕方に中断した歌物語の続きを。

第五夜 詩人の旅路

詩人が紡いだのは華やかさはないが、あたたかみのある歌だった。歌は大変喜ばれ、その日は子供の部屋で寝た。

寝る前、子供は詩人にいくつか質問をした。

「お姉ちゃんの名前はなあに？」

「私の名前はジュエルっていうの」

「私の名前はねりビエラ。みんなりビーって呼ぶの」

ほかに、ジュエルがどれくらい見えるのか、

どこからきたのか、りビーは次々と質問攻めにした。

質問に答えているうちにりビーは眠りに落ちてしまった。

いつも傍らにある犬とりビーにおやすみを言ってから詩人もまた眠りについた。

朝が来て、朝食をとってからジュエルは旅立った。

りビーは名残惜しそうにぐずるが、母親が何事かを言い聞かせて別れを告げさせた。

詩人はやさしく相棒の頭をなでて歩き出した。

ゆっくりと歩きながら歌を口ずさむ。

やがて人気のないところで豎琴のある弦を

かき鳴らすと一人と一匹の姿が消えた。

ジャンはいつもとかわらない退屈させるような日常が待っていることを信じて眠りについた。

これがすべてのはじまりで、

これから波乱に満ち溢れたいくつさせない非日常が待っているとは疑いもしなかった。

嗚呼、運命の齒車はどこで壊れ始めたのだろうか。或いはすでに壊れていたのだろうか。
そうだとしたら、いったいだれがそうなるように仕組んだのだろうか。
すべては箱の中の猫と同義である。

第一章「これで時計の針は動き出す」 完結

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（前

ここからが作者の通常営業です。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」

穢れなき白が大地を覆い尽くす季節に無味乾燥な灰色の石畳の街道を一台の箱馬車が通過する。通過する間も音もなく降り積もるそれが馬のひづめの鳴らす音を掻き消す。静寂に包まれた鉛色の空に興味を持たないのか御者は遙か前方だけを見据える。時折、吹きさらば風が駆け抜けていくと同時に粉雪を舞い上げて視界の妨げとなる。ほんのりとあたたかみのある馬車内で手持ち無沙汰で物憂げに窓の外を見やる青年と少年の間の人がこの国のことを考える。

「隣国とこの国の間には巨大な山脈があるからまだいいけど、最近やたらと好戦的になってきた。あと、海賊の略奪行為も頭が痛いし、

・・・」

頭を抱えて悩む人物は馬車の主にしてアイカシア王国の大貴族の末席に名を連ねる、アルフォード公爵家当主ジャン・マリス・アルフォード。一族があまりいなく必然的に当主となった彼は今、政治について悩んでいた。外患内憂とはこのことで非常に危うい均衡の下に成り立っている平和とこの国を憂いていた。この状況を打開せねばと意気込んでいた青いときは過ぎたとつぶやく。そう嘯いてみても意味はないとわかりきっていてもしてしまう。国中が雪に閉ざされるこの季節に国王と十二の地方の管理を任された地方公爵たちの会議のために国王の直轄領である天領にある辺境の館、「星藍玉館」せいらんぎよくかんに赴くところだったのを思い出した。はるか南方でしかとれない、この国では星藍玉と呼ぶ瑠璃をふんだんに装飾に使った屋敷だからそついう名前がついたのだ。みな一様に「館」と呼ぶが、ある種の複合施設と称したほうがわかりやすい。本館が一つの城以上に大きい。本館とは別に会議中に地方公が宿泊するコテージ風の離れが12ある。みな同じつくりで同じ規模なのはある意味で平等で無意味。本館には宿泊しないにもかかわらず各人の部屋まで用意されている。

無駄に部屋数が多すぎて活用されていない部屋や階は膨大にあり、無駄で散財のもとだと考えるものも少なくない。維持費や人件費も馬鹿にならないため、払い下げて孤児院にする案が通り、年が明けてすぐに孤児院として運営されるので使用は今月いっぱいまでとされている。近年戦争が続く、どこも孤児院は孤児たちであふれ苦しい経営状態が続くのでちょうどいいという意見が大多数だった。取り壊すのも惜しいし、博物館にしようとしても首都からは遠すぎるし、維持費を浮かせて軍備に充てたいというのが本音であった。だが、買い取りたいという酔狂な御仁が存在すればと仮定してのことだ。それ以上を議論しても詮無き事だと判断して窓の外を眺めた。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（後

初期よりかなり書き足しました。初期設定では屋敷の名前なんてありませんでしたし。もうちょっと文章を足してもいいかも。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

この物語にはふたつの世界が存在します。ひとつはジャン・マリス・アルフォードを主軸とする物語。もうひとつは詩人の少女と犬が渡り歩く世界。どちらかが欠けていればなかったことになる。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界

視界の端に灰色の何かが動くのを捕らえた。けたたましい獣の咆哮が複数聞こえた。

「あれは・・・灰色狼と・・・氷雪の魔狼フェンリル！

しかもかなりの大群で！普通は群れないのに」

灰色狼は灰色なだけの普通の狼だがまれに生育環境の影響で大きく育つ個体もある。あまり群れで行動はしないが繁殖期および子育ての時期は群れで行動する。フェンリルは氷の精霊の上位種で体調は優に2メートルを超える。気性の荒さと戦闘能力の高さで畏れられる。また、氷の精霊の下位種である氷の乙女フラウがいる。とっさに魔術の発動補助媒体である杖を右の太ももについたベルトからはずす。

携帯用につくられた50センチ程度の先端に直径10センチの水晶玉がついた青い金属製の杖を持ち、構える。もしものときにと執事に懇願されて血を吐く思いをして習得した魔法で撃退しようとしたが、その必要はなかった。風がやんだ瞬間、ヒュッと風を切る音がして三匹の灰色狼が同時に倒れ真紅の花を咲かせる。灰色狼を斬り捨てた彼の目前で立ち止まり、構える。彼の信頼する執事、桔梗が刀で斬ったことがすぐさま理解できた。彼女は返り血を浴びてわらっていた。何度も切り結び、斬り帰す。フェンリルは一刀両断されるとガラス細工のように脆くも儚く砕け散る。その光景は凄惨で血にまみれているがどこか危うい美しさを感じさせた。剣戟をジャンはどれも狙ったように頸動脈をきれいに切断していた。正確さと緻密さにくわえ技術がないとできない芸当だと感心した。万が一に備え杖は持ったままにした。ダンスにも似たステップで最後の一頭を倒した。終了したことを丹念に確認してから馬車から飛び出す。被害もさほどなくて、強いてあげれば馬車と桔梗の服が汚れてしまっ

たていどだ。

道中は比較的平穩だったといえよう。交通の要の街道だとキャラバンを襲う盗賊が絶えない。魔物のほうがマシだと語るものがある。一番恐ろしいのは生きている人間だと豪語する輩だっている。

それを実感しているので頷ける。王国に12人いる地方公は数字が大きければ大きいほど首都や天領から遠ざかる。一番近い第一公は半日程度で済むが、第十二公たる自分だと十日はかるくかかってしまったため何かと出費がかさむ。だが、次回からは多少軽減されると予想できた。しばらくして、馬車や服の汚れをふき取ると何事もなかったかのように走り出した。走り出す前に桔梗はこっそり狼の毛皮を剥ぎ取っていたのをジャンはしらなかった。殺風景な街道を通り抜け、魑魅魍魎が跋扈する森を抜け、満天の星空が瞬く中、十日間のたびを終えた。体感時間は数倍以上、帰りのことを思いやるとさらに疲労感が増したのはここに綴るまでもない。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界（後書き）

ここは書き加えなくてもいいと判断したため原文ママです。

第八夜 詩人の旅路

黒銀の毛並みを持つ犬を連れ歩く十代半ばの少女の詩人が寂れた路地で歌を紡ぎだす。それはありきたりな身分差故の禁断の恋物語。

題材が平凡だからこそ詩人の技能が試されるとされるその歌を紡ぐ唇は流浪の詩人とは思えないほど手入れされ、つややかで瑞々しい。少女が歌うと儚くも切ない独特の節が歌に追加され、不思議な余韻にわずかしいかない聴衆が酔いしれる。詩人は人々の喜捨により食いつないできた、そしてこれからもだろうとどこかさびしげに語る。ある日の昼過ぎに大通りから少し離れたところで歌っていると、隠してはいるつもり身なりのかなりいい男に話しかけられた。その男は初老寸前で髪の毛に白いものが混じり始めていた。相棒の犬が男の顔を覗こうとするものの帽子を目深にかぶり顔はわからない。

「何でしょうか？」

「すまんが、我が屋敷に来てもらいたい」

「ご用件は？」

詩人が立ち上がり身構え、犬は主人に害をなす者かと思つて唸る。

「我が孫娘の誕生日会で楽師を呼ぼうと思つてな。明日の夕刻この通りの突き当たりの屋敷に来るがいい。これがあれば入れるだろうな」

おもむろに紋章入りの金のバッジが投げ渡される。犬が飛んでキャツチして着地する頃には停泊していた馬車が走り出し、男はどこにもいなかった。犬がバッジを詩人に渡してそれを受け取ると黙ったままそつと頭をなでて抱きしめた。犬はうれしそうに甘え、しつぱをふって喜びを表す。しばらく考えた後に詩人は紋章をなぞり形を覚えてから生成り色の肩掛けかばんにしまい、立ち上がって歩き出した。犬はいつも目の不自由な主人を気遣い、主人の詩人は犬を労わり、そばにいてくれることに感謝する。

当たり前のように難しいこの関係は強固な絆の上に成立していた。

第九夜 詩人が紡ぐ物語の世界

辺境の館へたどり着くとどおじに雪は霰混じりに変わった。濃色の暗雲がたちこめ、眺めた者の気分を暗くした。ほかの馬車に目をやると見慣れた紋章のついた見慣れない装飾がつけられた馬車とまっていた。桔梗のみが気にかけたが、忙しいあまりにその考えを意識外へと追いやった。桔梗以下の使用人は主や自分たちの荷物を滞在する予定の離れに運び込むことに、ジャンは今年の議題について頭がいっぱいだったので馬車のことには誰も考えず、その場を離れた。離れの館についてからまず実行したことは掃除だった。月に一度住み込みの使用人が掃除するとはいえ、かなりほこりっぽくゆるい戸を開けて掃除する必要があった。寒風に身を縮ませながら3時間ほどですませた。

「まさか、ミカンと玉奈^{たまな}以外の全員ついてくるとはねえ。ボクはてつきりサーシャあたりは残ると思ってたよ。若作りはもうやめたら？もう若くはないんだし」

「肉体年齢は若いから若作りではありません。それに、ミカンさんは愛娘の玉奈ちゃんに心配だから残りました。それに桜花、貴女はもはや義務です。それくらい自覚してください」

使用人室で和気藹々と話していたつもりだったのだが、桔梗こと、桜花がサーシャと呼んだ鮮やかな董色の瞳のまっすぐな長い黒髪の十代はじめのメイドの逆鱗にふれたことから言い合いと発展してしまった。その言い合いはじゃれあい程度の意味しかなさず、必然的になかったことになった。事あるごとに他人をからかい、遊ぶ桜花の姿勢にあきれてしまったほかのメンバー。あの気まぐれで自由奔放な性格だから仕方がないと皆一様に口をそろえる。

「夕食は向こうでとるみたいだから当分楽できるんじゃない？」
どこからか持ち込んだワインに舌鼓を打つ桜花をよそに、ほかの使

用人は各自思い思いに少し早い夕食を取ったり、読書にいそしんでいた。檜の木の机に折りたたみ式のチェスセットを展開する。

ルールに則りながらも無秩序に無差別に、時には無意味な駒をとったりしながらゲームを進める一人遊びをしている桜花はゲームも半ばで切り上げてセットを仕舞い、窓の外を眺める。外は霰交じりの雪から完全な雪へと変貌を遂げ、風が雪を地面へとたたきつけるような猛吹雪になった。

「酷くなってきましたね。帰りに支障をきたさないといいのですが」色の濃いサングラスをつけた十代半ばの日本人形のような無表情のメイドアリサは左腕に留まらせた下僕のかなり大きいカラスの健康状態をチェックしてすぐにそう告げた。

「離れて本館をぐるりと囲むようにできてるから、異常があってもすぐ駆けつけられるからいいよね。距離も平等だし」

樂觀的な事とまかない口にする桜花を見て、サーシャは深いため息をついた。

「無事にすごすことができればよいのですが・・・」心配性なサーシャは不安そうに言った。

窓の外は暗雲が垂れ込め、不穏な自体を予言するようだった。

第十夜 詩人が紡ぐ物語の世界

アイカシア王国の恒例行事、地方の筆頭貴族と国王による報告会もかねた会議。それぞれの地方の特産品の出来具合、税収、人の流入、内政についてが大半の議題をしめている。稀にだが、政略結婚や婚約者決めなどがある程度で非常に殺伐と無味乾燥なことばかりなのは否定できない。紋切り型な答えと、予想通りのありきたりな議題に瑣末事ばかりがのぼるこの会議は退屈を通り越し、苦痛と拷問でしかないと感じる十三の席の末席の少年であり国の政治の一部を担う第十二公ジャン・マリス・アルフォードは自分や領民にとって有益になりうることを羊皮紙に書き取っていた。発言権は王都に近く、権力のある第六公までがほとんどを占める。末席の自分など数合わせ程度の意味しかないのは重々承知しているの行動だった。お誕生席に座る、話し合っても無為且つ不毛な話題について議論していてもいやな顔はせず、不適にふてぶてしく笑う国王をごく一瞬わずかに見てまた書き取り作業に戻った。アイカシア王国では国王の存命中及び、在位中は名前を公表されない。生存中は通り名で呼称される。死後、国葬の時の一度のみ公表される。国民も貴賤きせんに関らず、生存中には通り名で通し、死後本名が公表される。これは呪いなどから身を守ることから派生していて、建国時から今も連綿と続く風習として残っている。今代の陛下はショートヘアでこげ茶のツンツンした外側に跳ねたクセ毛を持つ青灰色の瞳の不良っぽいイケメンの青年。国王はジャンを見て不敵に笑った。ジャンが再度情報収集のため緒公を眺める。ふと、向かいの第十公の席に座る見覚えのない少女と一瞬だけ目が合った。漆黒のベリーショートの蒼い瞳の少女は膝丈の黒いゴスロリドレスに身を包みピンクの八重咲きの椿を三輪頭につけていた。こちらに気がついた彼女はにこりとほほえんでこういった。

「わたくし、父の名代で参りましたの」

「なるほど。通りで・・・」

「ええ、また機会があればよろしくと父が話しておりました」

「こちらこそとお伝えください」

小声でほんの少しだけ会話が続いた。会話が終了してからジャンが辺りを見回すと第四公の席が空いていたが誰も気にしていない様子だった。否、己が抱える問題にしか頭にならないのだろう。第三公は病弱で影が薄い中年直前の青年で有名。彼は発言できず、オロオロしていた。壁の時計の針が七をさしたとき、会議開始から三時間ほどで遅い夕食も含めた二時間ほどの休憩をとることになった。第三公と、上品な老婦人の第八公が化粧直しを理由に会議室である食堂を退出。二十分ほどで第八公は戻ってきたが、第三公は戻ってこなかった。アリバイとして『男性と女性の化粧室がかなり離れているため、どこに行ったかは知らない』と第八公は証言した。ここでやっと誰かが第四公が不在であることに気がついた。料理が運ばれると騒ぎがなかったように無言で誰もが席に着いた。食事中は雑談の類もなくただ沈黙がその場に横たわった。ジャンは王室専属料理人の料理を堪能しつつも頭の中で状況整理をかかさなかった。

第十一夜 詩人が紡ぐ物語の世界

だれもが事態の異常さに気がついていても事態を改善させるべく、話そうとはしなかった。食事が終わり、行方を尋ねたのは国王だった。

「おい、第三公はどこに行っただ？知らないか」

その一言から雰囲気は豹変した。

一人ずつ答えるも結局はてがかりはつかめずじまい。下男や下女らに搜索を言いつけようとする年長者の第一公の言を制して国王が驚くようなことを言った。

「今から探しに行かないか？」

年嵩の者が動揺した。何かと理由をつけてこの場に残ろうとするものを説き伏せ、探索隊が結成された。自由奔放、かなり行動的で子供と同じくらいの好奇心を持つ王を誰も止められなかった。妙なところで子供っぽい腹黒い彼を實のところ苦手とするものは多い。

だがジャンはそんな国王を好いていた。新しい風をもたらし、よい潮流を生み出すものになると確信していたし、なによりもきさくで豪放磊落なその性格に好感をもてたからだ。だが、いたずら好きで部分はどうにかしてほしいと考えているのも事実。幾度もいたずらに困らされ、気苦労を山ほどこしらえた苦い記憶はある点に目をつぶればとこっそりと愚痴をこぼしながら言う。こうして、半ば引きずられるように会議室兼食堂を後にした。

第十一夜 詩人が紡ぐ物語の世界（後書き）

ここは中途半端に区切るんじゃないかった。

第十二夜

しゃれた真鍮のランプを一人一つずつ携帯する。いつのまにか吹雪は降り止んだが、風向きの関係で正面玄関は吹雪で閉ざされ、何者かによって裏口も外側から塞がれ閉ざされてしまった。天井の頼りなさげなシャンデリアの照明だけでは心細く、ランプがあることで幾分か不安が取り除かれた。異様なほどに歩くものたちの口数は少なく、必要最低限にとどまった。隊列は王が先陣を切り、以下序列順に歩きジャンが最後尾。しばらく歩くと少し話をした第十公の席に座っていた少女に声をかけられた。

「怖いですね。こんな時間に出歩くのは初めてです。えっと・・・あ、自己紹介がまだでしたね。病気の父の名代で来ました。マルグリット・ジュリア・ゴーチエです」

「僕はジャン・マリス・アルフォード。今後ともよろしくね。こんな時間まで起きていたことは数えるくらい少ないよ。ちょっと眠いかな」

小さな声でささやかな交流をしている時に先頭集団がかすかな変化に顔をしかめた。だんだんと歩く速度がゆっくりからやや早足に、そして最終的に疾走した。属特有の臭気があたりに漂い始める。今までの凍てついた冬の空気とは違う生ぬるい空気が鉄のにおいを運ぶ。その正体がおびただしい量の血だとだれもが確信し、根源の部屋扉を王が開けた。

第十二夜（後書き）

マルグリット・ジュリア・ゴーチエは「椿姫」がモデルです。名前だけ。今回はそんなにいじらず、語尾の修正程度です。

第十三夜 グロテスク描写に注意（前書き）

作者の本気がこれです。かっとなってやった。後悔などしていない。

第十三夜　グロテスク描写に注意

王が手荒く扉を開け放つと、真冬特有の体の芯まで凍える空気が部屋唯一の窓の隙間から流れ込む。窓を背に、細身の優男がいすに座っていた。よく見ると右腕が引きちぎられているように見えた。後の司法解剖の報告書には、引きちぎられているのは服のみで腕のほうには丁寧に刃物で切断されていたと記録係の後の憲兵らは記述する。死体は服装から第四公と推定された。あまりのことに呆然としていると絹を数枚重ねて引き裂いたような甲高い悲鳴が聞こえた。悲鳴の大きさからしてあまり離れていないのだろう。彼らはすぐに走ってむかった。あまり運動をしたことがないのだろうか。体力のない第八公と第六公は追いつけずにはぐれてしまった。そんなことにも気がつかず、のこのりメンバーは駆けつけた。ある一室の扉が開いていて、中にはジャンのつれてきたメイドたち以外の下男下女らほぼ全員が無残な死体で倒れていた。唯一生き残ったメイドがいた先を目で追うと、惨劇の場だとわかり、驚愕のあまり動けなかった。青白い幸薄そうな顔をした頭のみがベッドに鎮座しており、開け放したオーク材のクローゼットの中から右腕が無造作に入れられ、サイドテーブルの上の部屋には不釣り合いな大きな花瓶には両足と左腕が手のひらと足の裏を上にしていけられていた。左腕には黒いバラが握られていて、中には水の代わりに血で満たされた。花瓶の下にはシンプルな便箋が置かれていた。床一面に血がまかれてむせ返る強烈なおおいに一時退散し、死因などを調べた。顔から第三公だと判明した。国王はこっそり便箋を手に取り、懐に収めたのをはつきりとジャンは見た。あまりにも精神衛生上よろしくない風景なので最低限調べられてから厳重に封印された。一度戻って状況整理だと王が告げると素直に従うことにして、不安と恐怖が入り混じった複雑な感情を漂わせながら歩いた。

第十四夜 グロテスク描写注意！（前書き）

また作者がやらかしました。後悔はしていない。むしろ誇りと思っている。

第十四夜　グロテスク描写注意！

惨劇が発生した扉が封印されてから第六公が肩で息をしながら走ってきた。第八公が見当たらない理由を聞くと、無我夢中でやってきたので知らないと答えた。詰問するまもなく、次には若い男の叫ぶ声が聞こえた。ふかふかの絨毯で足をとられて踏ん張って進むことが難しい階段を上りきり、長い廊下を走り終えるときらびやかで華やかなサロンに『陰湿小姑マダム』と影で呼ばれた第八公が変わり果てた姿で横たわっていた。彼女は左足がもぎ取られ、腹部が縦に裂かれて、彼女の足元に腹部の内臓がすべて縦に垂直に並べられていた。腹部にはぽっかりと穴があき、押し広げられ、体外に肋骨がきちんと整列していた。叫び声の主は長年使われていないサロンの掃除をしようとして発見したと証言。第一発見者をみていると誰かが、心臓がないと騒ぎ立てた。ふと、見回してみるとタペストリーが裏返されて血で魔方陣らしきものが描かれていて、そのすぐ下に漆黒の小さいつぼがあり、中には第八公のもらしい心臓があった。ジャンが、疲れて足元に視線を落とすと、血文字でなぞのメッセージ、もしくはメモ書きが見つかった。

『ミギウデ、ドウタイ、ヒダリアシ。アトハ、ヒダリウデ、ミギアシ、アタマダケ』

メッセージに寒気をおぼえ、わずかに身震いする。第六公と第五公が手洗いと落とし物を拾いに退室した。残されたものがそれぞれの思惑通りに動く。誰の手のひらの上で踊らされているとも知らずに。

第十四夜 グロテスク描写注意！（後書き）

実際に想像したら一番怖い現場だと思います。書いてから数年して今気がつきました。

第十五夜。　また地味にグロいです。

誰かまた欠けていることに気がついた一行は欠けた人員がやつてくるまで待った。そして一時間ほどしてやつと戻ってきたのは第五公のみだった。さらに三十分待つてみるも、こなかった。痺れを切らして探すことに。曲がり角の一角の部屋、目立ちにくい使用人室の扉が半ばまで開き、その隙間から明かりがもれていた。胴体のみがベッドに寝かせられていて、右腕は椅子に寄せられ、左腕は窓辺に立てかけられ、右足は傘たてに、左足は天井からぶら下がっていた。その後数人が捜しても頭部だけは行方不明だった。服装から判明したことだが、第六公だった。

ベチャリ、ズルズル、グチャッ。

何か、柔らかいものを引きずり、弄繰り回したかのような音がした。だれもが音源をみつけようと振り向く。そこには、新たな死体が量産されていた。死体はかろうじて人の形を保っているが、頭部意外体全体が赤黒いミンチ状に変化。さらに、右足が欠けていて頭部はこの国の最高権力者に次ぐ権力者のいつの間にかいなくなった第一公の顔だった。苦悶にゆがむ顔から死亡直前の被害者の受けた痛みが想像できる。廊下には点々と血痕が残り、玄関のエントランスホールへ続いていた。エントランスホールへの道を辿る時、誰もが漠然とした恐怖に囚われ、足音と息遣いのみが静かに響いた。廊下の先からとジャンたちの集団から地の匂いが漂う。第十公の代理のマルグリットの服に血がベツタリ付着していることに気が付かない。

最初は、足音を極力たてないように、次には早足に、最後には足音も気にせず皆一様に不安と恐怖を抱えて急いだ。

第十六夜　グロいです。注意

バタバタと騒がしい足音をたてて、息を切らせ、肩で息をしている。エントランスホールの歴代の国王の肖像画が飾られているはずのところ、等身大の人の形をしたつぎはぎの人であったものが、磔刑たつけいのように鉄製の杭で壁に縫いつけられていた。それは、いままで行方不明となり、遺体で発見された者の欠損した部位で構成された何かだった。その何かから固まり具合もバラバラな血が流れ出る。肖像画はホールの隅に立てかけてあった。メイドの数人組がほかの異変を伝えに来た。被害者の連れてきた使用人たちや関係者が次々と殺されていると。

ポタッ。

鉄臭い液体が一滴、臙脂色の絨毯に落ちた。

何も考えずに、条件反射でジャンは斜め右に跳んだ。回避しながら護身用に隠し持っていた短剣を防寒コートからとりだす。ジャンがいた場所に大きな漆黒の鎌が振り下ろされた。虚しくも空を切り、床にわずかに突き刺さる。鎌を振り下ろしたのは第十公の名代で娘のマルグリット・ジュリア・ゴーチェだった。周りを見ると国王と自分とマルグリット意外は死んでいることに気がつく。大鎌は血で染まり、柄の部分すらも元の色が判別できなかった。かわいらしい笑顔で惨劇をうっとり見つめていた。だが、目に光が宿っていない。そこは、狂気が支配する空間に変貌を遂げていた。コートの内側の魔法の発動媒体の杖に隙を見て魔術を発動できるように少しずつ一定の魔力量を溜め込む。

第十七夜

離れの館で気兼ねなくくつろいでいた使用人の一人が第六感で何かを感じ取った。

「血のにおいがする」

使用人の姿から本来の姿に戻った人外の面々が穏やかな時間をすごしているときに投げかけられてた波紋。それはほかの面々へと伝播していく。気になった鮮やかなすみれ色の女の子でメイド姿をしていたサーシャルベルと人外のメンバーに名乗っていた彼女が問いかける。

「どうしましたか？」

茶器を白い絹布で拭きながら人外らに桜花と名乗った彼女は本館の方をむいてさらに続ける。

「何か血なまぐさいことが起きてそう。すごくいやな予感……」

「それではその確認に行ってきます」

ちょうど桜花とサーシャルベルの中間ほどの年齢の少女で、いつも黒いサングラスをはずさない偽名ではパトリシアと名乗っていた彼女、アリサが立ち上がり、確認に名乗り出た。

「それじゃあアリサ、いつてきて」

「はい」

アリサが魔法で予備動作も無く彼女自らの影が伸びて飲み込まれるように消える。

そうこうしているうちに夜も遅く、各々眠りに着こうとする。

「ボクは行くところがあるから。すぐに戻ってくるよ」

寝入ろうとする彼らにそう告げて漆黒の外套を身にまとい、真鍮の止め具でとめて刀を手に夜の闇へとけていった。

第十八夜

壁に突き刺さった鎌を持ち直し、また振り下ろす。不規則な動きに戸惑い、思うようにいかない歯がゆさを感じるジャン。

「貴方達を殺すと全部終わるのに・・・しぶといわね」

「な、にがっ。こんなことしてもいいと思って・・・うわああっ！」
足がもつれ、体制を崩した瞬間に右肩から、左わき腹へと斜めに斬られた。傷口を押さえて、いままで庇っていた国王の腕を掴み、術を発動させた。

「転移！」

淡い光に包まれて二人は消えた。

消えてすぐに月明かりに照らされたマルグリットの細い影が膨張し、人の形を取る。影は解けて消えて一人の人が現れる。

「・・・ひさしぶりね」

パトリシアことアリサがいつものメイド服ではなく、私服の紺色のセーラー服に何もかもが黒い刀を持って見据える。死体を路傍の石を見るような目で一瞥して、抑揚のない感情のこもらない声で問いかける。

「楽しいの？」

「楽しいわ。だってこんなにも綺麗じゃない。だからもつともつときれいにするの。それに馬鹿だったわよ。アイツら、殺さなきゃ殺すって脅したら殺したのだから」

「そう」

それだけを聞くとすべてを理解したアリサは、ほかに何も聞かず建物影に入り消えた。

第十八夜（後書き）

楽屋裏雑談ゝあれだよね、くらげに刺されると痛いよねゝ

作者（以下作）「はい、どうも。精神破綻者のこのシリーズの作者^{みな}水上^{かみれい}鈴です。頭のねじが無くなればなくなるほど執筆速度があがります」

ジャン「このシリーズの一応主人公のジャンです。当初の予定（プロット段階）では『ジツチャンの名に懸けて！』みたいな展開だったのにこうなりました」

作「人間の顔って左右非対称だよ。人体の神秘だねゝゝ」

ジャン「次のコンセプトについて一言お願いします。・・・ダメだ、この人」

作「政略結婚と恋愛結婚かな。バトルシーンなしで。腹黒をスパイスにして。あと、この話の後日談も」

ジャン「なるほど」

作「人間の考えなんてすぐかわるものです」

ジャン「何はともあれ、次回をお楽しみに」

作「・・・セリフとられた」

作「サブタイトルに意味が無いって知っていた？」

ジャン「もう知っています」

作「つまんない」

終われ

第十九夜 間章 ホラー要素満載。かも

年末の恒例となった国を支える12の公爵家と国王との会議からはや数週間、年が明けて数日の冬の午後。

「・・・という事件があつた」

さほど大きくはない屋敷の庭園に、専用のスタンドで吊り下げられた青銅のランタンがオレンジ色の光を灯す。それが数個個在り、ささやかなお茶会をひらいている主たちを等間隔で取り囲み魔法のかかったランタンが照明器具と暖房器具の役目を果たす。年末の恒例となった国を支える12の公爵家と国王との会議のことの顛末を透明感のあるサファイアブルーの瞳を伏し目がちにしながら、事実のみを述べて館のあるじのジャン・マリス・アルフォードは伸びてきていた淡いプラチナロンドを気にしていた。その向かいには、ジャンに似ていて年頃も近そうな大き目のエメラルドグリーンの瞳の淡いプラチナロンドの少女が瞳を輝かせて耳を傾けていた。

「ああ、あとね、第四公のそばには第四公が連れてきていたメイドが惨殺死体でみつかった。第四公にばかり気を取られていたけどね。まあ、僕の話はこれくらいで終わり、もう戻ろう。だいじな異母妹いもむとに風邪でもひかれたらたいへんだ」

そう言つて立ち上がつて庭園を後にするジャンをしばらく見てからジャンの異母妹の彼女はすっかりぬるくなつてしまつた紅茶を余つた茶菓子とともに飲み干した。

「おかわりはいりませんか？」

気を利かせたのか、まっすぐに艶やかな黒髪ロングのシンプルな黒色のメイド服のメイド、アリシアが紅茶のポットをみせて機嫌を伺う。

「・・・いらないわ。もうそろそろ学校も始まるから。明日から学校に戻る準備をして、明後日には学校の宿舎に戻るから」
すこしだけ悲しそうにして早足で庭園を後にした彼女を見送り、彼

女が屋敷に入ってしまったてから片づけをし始める。

「あのおてんばお嬢様がどうしたのでしょうかね」

魔法のかかった青銅のランタンの明かりを一つ一つ消しながらつづやくアリシア。

ジャンたちが住む屋敷には一年中日の光が差さない一角が存在する。そこは資料倉庫兼書庫として利用されているそんな一角に生き物か何かが動く気配があった。その気配は複数あり、音もなく何かを探っていたようだった。せわしなく動く気配を捉えようとする気配があった。

「ねずみ、みいゝつけたあ」

やや高めの女の子の声がした。日の差さない一角でも僅かに日の光が差し込むところにノウサギが現れた。そのノウサギは立ち上がったときの高さは耳を含めないと150cmほど、耳を含めると160cm強のこげ茶色の野兎が首にシンプルな真鍮製の装飾の懐中時計を真鍮の細い鎖でネックレスのようにして首にかけていた。声の主はノウサギだった。ノウサギの右前足付近がキラリと光ると闇の中へ走った。一時間もすると、黒装束に身を包んだ男たち十数人が地下の牢獄に入れられた。牢屋の前を跳ね回るノウサギ。

「ミミ、今回のねずみは大量じゃないの？」

地上からの階段を一段一段ゆっくり降りてきながらノウサギに声をかけたのは、イタズラに成功した子供のように微笑む屋敷で執事として働く一見、男か女かわかりにくい桔梗と名乗る少女だった。桔梗の手には柄の長さが1mほどもある黒い鎌が握られていて、ミミと呼ばれたノウサギの右前足には鈍い銀色に輝くダガーが。儚げな蠟燭の明かりだけがあたりを照らす。

「ミミ、ねずみで遊んでいいのは、全部吐かせてから。・・・さて、聞かせてもらおうか、この屋敷で見聞きしたことすべてを」

数人ずつ牢獄から引きずり出しての尋問。すべてを終わらせて、その結果をレポートにまとめると黒束全員を地下の更に奥深くの大広

間へと魔法で瞬間移動させ、大広間に一人と一匹は移動してから唯一の出口の扉の鍵を閉めた。

「ねえ、ミニ。賭けをしようか。ねずみをどちらが多く狩ることができるか」

ひさしぶりの獲物を前に自然と顔に笑みのこぼれた今はまるで捕食者のように残酷な桔梗が提案した遊び。

「いいよ。じゃあ、私の持っているコインを投げて地面に落ちたらスタートね」

そういつてミニがどこからともなく取り出した銅貨をコイントスした。コインが地に着くか着かないかの瞬間に両者が動く。桔梗は右に、ミニは左へと飛び跳ねた。ミニの持つダガーが黒装束の四肢を切り刻む。ダガーとは小型のナイフで、小回りが利くが威力は低く仕留めるのに時間がかかるので使用者のスタミナが切れやすいのが特徴。そんなことはおかまいなしに、斬っては黒装束が動かなくなるとすぐにほかの黒装束の男に斬りかかる。逃げ惑い、逃げることもかなわず、『モノ』となって血におちる。飽きてしまったおもちゃを見捨てるように動かなくなった黒装束に興味を無くして放置する桔梗とミニ。桔梗は、大きな黒い鎌を振るう。まるで命を刈り取る死に神のように。顔や服に返り血が付いても気にせず愉悦にゆがんだ顔で鎌を振るう。十数人ほど残っていた黒装束が後二人になるまでそう時間はかからなかった。

「ねえ、桜花」

ミニが桔梗の本名、桜花と呼んだ。

「どうしたの？ミニ」

鎌を振るう手を止めて、地下牢から持参した縄で残った二人を縛り、猿轡をかませた後、ミニの方を向く。

「えっと・・・すぐに遊ぶのを終わらせるのはもったいないかな、って思うの」

「そうだね。それじゃ、どれだけ長く遊んでいられるか、挑戦してみろ？」

子供のように無邪気に笑う一人と一匹。黒装束を一人ずつ引きずって更に奥へと消えていった。無邪気で残酷で不気味な笑い声と、惨劇を残して。

第二十夜 詩人の世界（前書き）

詩人さんのお話はこれで終わり。全編にちよこちよこはさんでいたお話を要約しました。

第二十夜 詩人の世界

黒銀の毛並みの犬を連れた吟遊詩人のジュエルは初老の男に言われたとおりに屋敷に行き裏口から、通された。詩人はパーティ会場の隅に座り、細々と豎琴を奏でる。会場は豎琴の音に包まれ穏やかな空気が流れる。奏で終わると夜も更けていたのでその日は泊めてもらった。ささやかな客室では詩人は豎琴がいたんではないか、弦が切れそうになっていないかなどを確認した。相棒である犬は暖炉のそばでしっかりと待機している。こうして詩人ジュエルの夜は更けていった。

斜陽の光が世界を包む頃に濃く銀の毛並みを持つ犬を従えた盲目の吟遊詩人の少女、ジュエルは昼間の男に誘われて言われたとおりに屋敷の門をたたいた。ジュエルをよびだした男の侍従らしき人物に質素な部屋に案内され、宴の準備ができるまでしばらく待つようにと言い渡されたジュエルは暖炉のそばの臙脂色のソファにゆっくりと腰を下ろして相棒の犬をそばに呼び寄せた。

「マルコシアス、疲れていませんか？」

優しく名前を呼んでさらに近くに来るように手招きをした。そしてそつと犬の頭を包み込むように抱きしめる。

「いえ、疲れてなどおりません。しばらくの間お休みください。長旅のうちに休める場所など数えるほどでしょうから」

人の声で主人の体をいたわる犬は主人である少女に鼻を擦り付けながら主人を気遣う。甘えてくる相棒を少女は愛おしく思い、優しい言葉をかけながらしばらくの間ゆっくりと撫でる。パチパチと暖炉でまきの爆ぜる音を耳にしながらうとうととまどろむ。薪の爆ぜる音と主の寝息以外の音を聞いて勤勉で忠実な従者たる黒い犬がふと扉のほうに目を向けて柔らかい若い男の声で主人の覚醒を促す。扉を数回ノックされた後、

「お時間でございます」

と屋敷に仕えるものから呼び出された。

「今行きます」

身に積もった疲労を隠してしまいながらも前に進む。屋敷に仕える者に軽く手を引かれて案内されたのは華やかな装飾のダンスホールだった。その隅のイスの近くで『ここでしばらく宴が終わるまで歌を奏でてくれればいい』との伝言を預かっておりますと告げるとそつと目立たぬように何処かへとジュエルを案内した者は去っていった。あっけなく去ってしまったので数秒間考え込んだ後「もう、なるようになれ」とつぶやいて用意された椅子に腰掛けて豎琴を爪弾きながらどんな歌物語がこの場にふさわしいかを試行錯誤しながら即興曲をいくつかかかるとひいた。

その夜、ジュエルは屋敷の主人に腕を認められ、主人の書斎に呼ばれた。

「なかなかのものだった」

「ありがとうございます」

主人に椅子を勧められて、

暖炉のそばの椅子に腰掛けた。

思いがけず主人のほうから話を切り出されてジュエルは戸惑った。

「旅の楽士と聞いているが、楽士となってどれくらいになるのだ？」

「私の中でコレしかないと思い、生きていくためにこの道を選びました。気づけば数年はあつという間でした」

晩冬の星降る夜に穏やかで平凡に時は過ぎていく。

「一曲、わたしのために歌ってくれないか？」

礼ははずむ」

「いえ、お礼はいりません。それまでに十分いただいておりますから」

「そうか」

「ええ。それでは春の祭りの夜に春嵐と共にやってきた事件をモデ

ルにした歌にしましょうか」

シンプルなアイボリーの肩掛けカバンから商売道具で相棒ともいえる豎琴をとりだして静かに語りかけるかのように歌いだした。ジュエルの傍らでは旅の相棒の犬がジュエルを見守る。

翌朝、一人と一匹は遠くに潮騒の聞こえる道を歩きながら朝の清々しい風を受ける。相棒の黒銀の毛並みの犬に詩人の少女が話しかけた。

「マルコシアス、次はどこに行きましょうか」

すると、犬のほうから柔らかない男の声が返ってきた。

「あなたとならどこへでも」

答えを聞いて、詩人は花が咲いたようなかわいらしい笑顔で上機嫌に歌を歌いだした。その歌声を犬はいつまでも聞いていた。

第二十一夜 間章終了

「・・・お兄様は近頃縁談の話を勧めてくるわ。自由に恋愛できないのはわかっていているけれど、いい加減婚約者でもない和白い目で見られるし・・・」

ジャンの妹は自室で一人悩んでいた。

「異母姉のお姉さまは政略結婚だったけど、幸せそう。私だってそういう相手とめぐり合えれば・・・」

お茶会の開かれた翌日の夕方。ジャンの書斎に足を運び、数枚の紙を連ねたレポートをジャンに手渡した桜花。レポートを受け取ったジャンは、ため息を一つつきしばらく考え込んだ。

「害獣駆除おつかれさま。今回は多かつたね」

ふんわりと柔らかく微笑み謙遜する。

「いいえ、それほどでもありません。」

ミミがいてくれて助かりました。」

「ミミには悪いけど、春には王都に行くから次は王都に行ってもらうように頼んでおいて」

桜花は丁寧にお辞儀をして答えた。

「わかりました。しばらくは駄々をこねて行きたがれないかもしれませんね」

レポートをしまってから、ジャンは立ち上がり、書斎から出て行った。

春はまだ遠い。大陸でも北に位置するこの国の短い春が誰もが恋しいと語る。

春とともに波乱も訪れようとは誰も思っていなかった。

第二十一夜 間章終了（後書き）

あとがき ホラーゲームが好きです

作者（以下、作）「今回は短めかつ、調子に乗ったスプラッタな回となりました」

桜花「はじめましての方は、はじめまして。ボクは桜花おうかと申します」
作「今回は気が乗らない＋書きたい作品があったためこうなりました」

桜花「キャラ情報を後ほど記載するのでもしよければ参考資料に」
作「桜花は書いているうちに作者でも予想のつかない行動をしてくれるからと、純粋に好きです。今まで作った中で」

桜花「ボクはこれでも作者はスプラッタ方面では自重しているほうだと思う。作者はスプラッタ描写の方はストッパーがないと子供には見せられないレベルになるからよく周りがとめてくれるだけマシだよ」

作「精神状態が悪い時だと前編みたいになるよ」

桜花「あれは各所にパク・・・じゃなくてオマージュじゃないかと散々いわれたのはここだけの話」

作「言葉のオブラートに包んでくれておかーさんはうれしいよ」

桜花「というか、ジュエルってだれ？」

作「良くぞ聞いてくれました。ジュエルは尺の関係でもつと本編の話を出したかったけどもだせなかったからむしゃくしゃして昔に書いたキャラをだしてしまっただけのキャラ。そしてちょこちょこはさまれる違う物語の主人公の名前」

桜花「いわゆるカツとなつてやってしまったやつですか」

作「そういうこと。ちなみに本編と同時進行&とあるキャラが大きくなった時のキャラってこのシリーズの裏設定にある」

桜花「やっぱりダメだね、この人」

作「いいじゃない」

桜花「尺の関係で切ります。それでは」

作「今度こそ言いたかったのに・・・」

つづく

第二十二夜 最終章 春は踊る

薄い青灰色の石畳の続く街道、春霞たなびく緑に萌える山々の稜線を眺めながら馬車に揺られる旅をしている淡いプラチナブロードにサファイアブルーの瞳の儂げな少年、ジャン・マリス・アルフォードは物憂げに窓の外を見ている。花の蕾が綻びはじめ、これから向かう先の王都で春に開かれる花祭り（はなまつり）と同時進行の隣国や同盟国との対談に頭を悩ませていた。

「・・・どうすればうまくいくのだろうか」

思わずため息をつきながら地震のうまい立ち回り方について策をめぐらせていた。石畳の上を馬車が進むので揺れるたびに深い眠りの底へと誘われそうになる。眠ってはいけけないと必死に自分に鞭打ちながらも結局は眠気に勝てずに意識は闇の中へと滑り落ちていった。

一人で乗るには広すぎる馬車で揺られていたジャンは一際大きい揺れで眠りの深い泥沼から一気に意識が浮上した。窓の外を見ると空は茜色に染まり、紺色が茜色の太陽と光を侵食し始めていた。

「情報屋の刻時館^{こくじかん}は記憶が確かならこのあたりにあるはず・・・」

何かを探してじっと目を凝らす。ゆっくりとした速度で進んでいくと進行方向から小さな灯火が見えた。暗がりなので誰なのか確認しようとして危うく馬車から身を乗り出しそうになった。灯火の持ち主の顔がわかる程度まで接近すると、ジャンがやっぱり牧村さんだとつぶやいた。

「マキさん、いいえ牧村さん、おひさしぶりです。いきなりですが案内をお願いします。」

「お久しぶりです。それではご案内いたします」

ジャンがマキと呼んだ人物は、深緑のまっすぐなショートヘアに抜け目のない獣のような髪と同じ色の眼をした若い青年が礼をした。

マキは手に大きなランプを持ってジャンをさがしつつ街道筋で待っていた。軽い身のこなしで御者台に飛び乗って二頭立ての馬車を操り始めた。馬車は街道から外れて深い森の中を進む。街道を進んでいたスピードよりは速かった。走馬燈のように流れていく森の木々をながめているうちに馬車が刻む一定の振動とリズムが心地よく感じられてまた泥沼のような眠りに抗ったりせずにはゆるゆると落ちていった。

「到着いたしましたよ」

髪の毛をうなじのところでオレンジの紐でひとつにまとめ、紺色のスーツに銀縁のメガネをかけた藍色の瞳と髪 of 年齢と性別不詳の若々しい執事が、馬車からおりるための踏み台を用意し扉のロックをはずして、馬車の扉を開けてそつと主に声をかけた。

「桔梗、すっかり寝てしまったみたいだね。それにしても、あの館を訪れるのは本当に久しぶり。恐ろしい人外魔境じんがいまきようの主は相も変わらず心の隙間を埋めるために物語を書いているのだろうか」

すまなさそうに執事の桔梗に声をかけた。

「それはわかりませんが、風のたよりでは悠々自適にやりたい放題の自由人であることは知っています」

執事の桔梗はてきぱきと踏み台をしまつて少しの荷物だけを持って主を待った。マキこと牧村がランプを持ってはるか先方、大きな黒い屋敷の門前にひっそりと立っていた。

「行きましようか。きつと待っていることでしょうし」

「そうだね。いこうか」

確実の夜といえる時刻となった森の奥、訪れることがひさしぶりとなつた質素な館をめざして二人は歩き出した。

第二十三夜

緑青色の青銅の門をくぐり、重苦しい扉の先には薄暗い不気味な赤黒い色で統一された内装のエントランスホールが二人を出迎えた。「いつ来てもこの刻時館こくじかんは悪趣味と言いますか、気味が悪いと言いますか、とにかく来たいと思わせるようなインテリアとは言いがたい屋敷ですね」

寡黙にジャンに仕えている普段とは打って変わって、子どものように暗い色ばかりの刻止館に正直に感想を述べた。エントランスホールの扉をくぐる前にあらかじめ決めた部屋で落ち合うことにした。ジャンは気になっていた事柄の情報を求めて刻時館の主人のもとへ。ジャンは、マキに案内されて揺らぐ蠟燭のおぼろげな灯りだけの何もないエントランスホールと変わりない色の内装の廊下を歩いた。長い廊下のつきあたりの扉にマキが控えめにノックをして小さい声で中から入室の許可が得られた。暖炉のそばにジャンの目的の人物を発見した。そつとマキが椅子を差し出したので、それに座ると会いたがった人物とかちりと視線が合わさった。

「で、何の情報をお望みで？」

ふつ、と笑ったのは赤いリボンをカチューシャのようにつけて、装飾の類の一切ない黒いワンピースに白いハイソックスに小さな赤い靴をはいた、首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカーのようにつけている少女だった。彼女は暖炉のそばで赤い車椅子に座り、ガラス玉のような生氣のない空虚な眼でジャンを見た。

「ちよつと気になることがあってね。真夜マヤ、快樂殺人者の牧村さんを傍におけるくらい肝の据わったキミに頼みたいことがある」

「あらなに？・・・安くはないわよ。だけど、今日は暇つぶしを求めていたの」

「今回用意できる報酬は。要求は。でどうかな？」

話を切り出した時に強い春の嵐が屋敷を包み込んだ。そのせいでジャンの提示した要求と報酬のあたりが雨風のせいでマヤのそばにいたマキこと、まきむらいつき牧村樹には聞き取れなかったが、マヤにはしっかりと聞こえていたようで、くすりと笑って薄く紅をさしたくちびるが弧の字をえがいた。

「ふふふ、いいわよ。いい暇つぶしになりそうね」

「交渉成立」

話ほとんどん拍子に進んだようでお互い満足しているようだった。それからすぐに別れた。ジャンと桜花は王都へ、牧村と真夜は屋敷の奥へと。

第二十四夜

ペースを速めて馬車の馬に鞭打ち、ジャンと桔梗の予定通りの時刻に目的地の首都へと到着。荷物をまとめてそれぞれ来客へとあてがわれた王城の客室へと続く長い廊下を移動する。

「やっとなつた。予定通りで安心したよ。でもあの嵐は予定外だった」

「ここまで天候が荒れるとは思いませんでした。今夜も風が強いのでまた嵐になるのではないでしょう」

「昼間が大丈夫なら祭りに差し支えなさそうだね」

「だによろしいのですが」

あてがわれた部屋についたころには日が暮れていた。

ジャンの出席する同盟国を交えた会談のために桔梗が衣装を整えて送り出した。

「いつてらっしゃいませ」

「帰るのはよほどのことがない限り遅くならないから心配しないでね」

「わかりました」

ジャンがでていくと紅茶をいれてのんびりとくつろいでいた桔梗は使用人用の部屋のベッドの下とクローゼットの中から気配がすることに気がついた。

そこで、飲んでいた紅茶をサイドテーブルに置いてベッドの下に手を入れて何かを引っ張り出した。茶色のノウサギと対面した。

「ミミ、なんでこんなところにいるの？」

「待ち伏せして驚かして遊ぼうとしたけど、タイミングが掴めなかったの」

桔梗はあきれて物も言えずベッドに腰を下ろして、ノウサギをベッ

ドの上にゴミを捨てるように落とした。

「あいたつ、ひどいよ桜花。せつかくがんばってアタシがとってきたお城の隠し部屋や隠し通路も含めた完全版の見取り図を無駄にするの？」

「しないさ。この仕事の時ぐらひは桜花って呼ぶのやめてほしい」

「ふたりつきりとか、知っている人の前だけとかぐらひはいいですよ」

桜花こと桔梗は言い合いの前から気になっていた観音開きの平凡なクローゼットに近づいて開け放つ。中には幽霊のように半透明の現実味のない五歳程度の白いワンピースの女の子がうずくまっていた。
「やつほー。ひさしぶりじゃん、ライ」

「ひさしぶりね、桜花」

ミミをがっしりと右手で捕まえて、左手で幽霊のように捕まえられそうになさそうなライと桔梗が呼んだ女の子をしっかりと捕まえる。
「ねえ、ライ、ミミ。ちょっとお願いという名の作戦があるんだけど、いいかな？」

ふよふよと彷徨っていたライは桔梗のそばにとどまり、ミミは桔梗の手から逃れようともがいていたがやめた。

「なあに？」

「どうしたの？」

桔梗はミミにお願いとやらを囁いてからライにも囁いた。すると、ふたりはにやりと笑ってその作戦に快諾した。くすくすと意味深に笑いながらライはすうつと消えていって、ミミはベッドの濃い影へと飛び込むと水へ潜っていくかのように魔法を使ってどこかへ消えた。桔梗も魔法を使い、自身を中心に竜巻が発生し数秒後には部屋にはだれもいなくなった。

第二十五夜

夕刻に国をまとめる十二の公爵と隣国や同盟国の国王もしくは大使を含めた盛大な会議を行われようとした。特に意味のない儀礼的なこの国の国王の挨拶からはじまり十二公爵の挨拶、各国の大使や王の挨拶でオープニングを飾った。会議といっても、会食がメインであることを経験則から知っていた。酔いたいとは思わないうえに飲めない体質のジャンは度数の低い果実酒をかなり薄めたものをごく少量ずつなめるように口にしながら他の人の話をそれとなく聞き、情報収集を怠らなかった。ジャンと同じ干菓子を取ろうとした人物がいたらしく、二人ともほぼ同時に伸ばそうとした手が止まった。

気後れしたジャンが譲り、手にしようとした人の顔を見ると驚いた。同盟国の極東の島国の帝で自分と同じ年頃の男だった。彼は黒い髪と黒い目をしていてこのアイカシア国では珍しかった。帝はおっとりとした優しい笑みを浮かべてジャンに譲った。その帝はアウグストウスと名乗った。ジャンは心の中でアウグストウスの意味の『尊厳者』と言う言葉を幾度か反芻していた。意外にも穏やかな気性が似ていたのか、とくに問題もなく話は進む。

「ボクはこの国に興味がある。だから案内してくれないか？」

「ええ、もちろんですよ」

運命とは不思議なモノで二人は友となった。

第二十五夜（後書き）

前半部終了

アトガキと言う名の言い訳。

「もう終わらせるならオールキャラの豪華大盤振る舞いで」が今回のコンセプトです。

ごめんなさい。このまま突っ切ると規定ページ数をぶっちぎるので止めました。

僕も疲れたよパ ラッシュ……

燃え尽きたぜ、真っ白にな……って感じです。苦しい、苦しいといいながら書いていると物語の中盤ほどで脳内麻薬が精製されておもしろいほどスィスイ作業がすすみました。どうしてでしょうかね。

第二十六夜　グロイです。

日付が変わる一時間ほど前に大きな柱時計が終了予定時刻をさした。その直後、柱時計の大きなボンボンという音で皆、熱に浮かれたように大声での雑談や商談に花を咲かせていた者たちが物の怪か何かにとりつかれたようにいっせいにホールを出て行った。主催国のアイカシア王国の貴族の末席に名を連ねるジャン・マリス・アルフォードは異様な光景に驚いて、うまくはいいい表せない靄のようなあいまいな違和感を感じ取った。隣にいる先ほどまで話していた同盟国の帝も表情には出ていないが、驚きのあまりに動けなかった。パーティ会場の大きな扉が閉まるまで硬直はとかれなかった。しまった直後でさえも起きたことの理解に苦しんだ。

「どうした？　いかないのか？」

赤ワインの入ったグラスを片手にほろ酔いなのか朱に染まった頬をしたアイカシア王国国王が陽気だと評される普段よりもさらに陽気に語りかける。

「陛下、私はもう少しここにいようかと思えます」
わたくし

ここでジャンは素直にきっぱりと自分の意見を述べた。

国王はグラスを近くのテーブルに置いて、水差しの水を新しいグラスについて飲んで酔いを醒ましながらジャンの話を聞く体勢をとった。

「どうしてだ」

「鐘の音と同時にここに残った三人以外はまるで亡霊にでも憑かれたとしか表現できない表情やふらふらとした歩き方で出て行きました。通常であれば、一人や二人抜けてしまっても・・・となりますがあれほどの人数が出て行く様子から違和感のようなものを感じました」

新たに水差しから水をついで数杯目の水を飲み干した国王は考え込んだ。話を聞いていただけの帝が思い出してはっとした。
みかこ

「そういえば、出て行った人たち全員に黒い影のようなものがまとわりついていました」

「黒い影・・・何かの術のようだな。たしか今では禁じ手の人を操る魔術があつたな」

すっかり酔いが消えた国王が闇に葬り去ろうと自身が躍起になつていた術のことを話題に出した。

「あの時、先代が後世に残してはいけないものだ判断した。たしか、関する資料はすべて焼いてしまったはずだが・・・」

「国や政府が消そうと躍起になつたりするものほど、ひとは集められます。とくに禁断の、などがつけばなおさらです」

ジャンは王を責めたりはしなかった。

「完璧だと思つていても穴はあります」

帝も責めはせずにフォローする。

「だとしたら、まずいな」

「一刻も早く術者の特定と術の無効化をせねばなりませんまい」

危機感をいち早く感じたジャンがサファイアブルーの瞳に鋭い意思の光を宿らせて語る。視線を合わせると三人は黙って頷いた。そして、ジャンはマントの内側から50センチ程度の先端に直径10センチの水晶玉がついた青い金属製の杖をとりだして左手に握り締めた。国王は何かの短い呪文を唱えて大きな両手持ちの剣を召喚。黒い瞳を不安一色に染めた帝は腰の小太刀を抜いた。その数秒後、ぞろぞろとホールを出て行った人たちが全員帰ってきた。ただし、無残な動く死体となつていたが。ある者は首をきれいにくりぬかれて真紅の血で服を染色していた。ある者は頭の半分ほどを鈍器が何かで碎かれ、なかみをそこに撒き散らしていた。またある者は上半身の半ばほどを斬られていてもなお動いていた。むせ返る血のにおいにおののいた。

第二十七夜

「生ける屍リビングデッドとはなんと厄介な……。扶桑ふそう！扶桑！」

帝がもしものためにと、青ざめた顔のまま隠れていた従者を呼んだ。どこからともなく、僧侶の着る黒い衣を身にまとった男か女かわからない者が現れて臨戦態勢をとる。ジャンが暴言を吐きそうになるのを自制して国王に視線を向けて指示を仰ぐ。

「零時の鐘がなったら、強行突破で逃げるぞ」

「御意に」

ジャンは自身が驚くほどに静かに答えた。

「かならず……。生きて帰ってみせる。扶桑ふそう、背中には任せた」

「承知いたしました、我が君」

扶桑と呼ばれた帝の従者はすらりと刀を抜いた。帝も小太刀をかまえた。国王は剣を握り、静かに息を整える。生ける屍たちは四人を囲む輪をじりじりと狭めていく。ジャンは小さくこれから繰り出そうと考えた魔法の呪文の詠唱に集中する。そして、時計の鐘が鳴った。

まず先に動いたのはジャンだった。炎の嵐を魔法で巻き起こして道を作る、その次に国王が行く手を遮る屍たちを斬り捨て、次いで帝とその従者が追っ手を蹴散らした。

それを数回繰り返して唯一の出口の扉まであと少しのところで、新たな生ける屍がやってきた。

「これって、絶体絶命じゃないか？しかもうちのメイドとかなんだが、こいつら」

国王が黒く変色した血で染まった剣を振り回しながら言った。予想以上に丈夫な生ける屍たちに辟易してしまう。どうしても疲労が積もり、肩で息をしてしまう。

帝はとっさに機転を利かせて、小太刀を床に突き刺して術の基点と

して、結界を形成してどうにか三人を休ませようとした。

「この中に入って少しでも休んでください!」

結界をつくるとすぐに声を張り上げて結界の存在を知らせる。すぐに結界に入って体を休める。

「どこも怪我をしていませんか?」

帝が心配そうに気遣って、怪我をしていれば応急処置程度の治療魔法ですが治療しますよと申し出る。が、幸いにも疲労のみですんでいた。

「これはまずいな。ジリ貧の絶体絶命」

国王が結界ににじり寄る屍たちをにらんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023y/>

幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

2012年1月5日19時52分発行